彼らは応答する――映画『プリズン・サークル』（坂上香監督、2019）

勝部美星

「加害者」と聞いて、何をイメージするだろうか。既存のマスメディアで「加害者」は、異なる次元の存在、ある種モンスターのように描かれている。「加害者」となった彼らは、途端に彼らの個人性を奪われると同時に加害性が前景化し、結果的に人間性を剥奪されている現状がある。

坂上香監督『プリズン・サークル』（2019年）は、日本で唯一「Therapeutic Community（回復共同体）」（以下TC）プログラムを行う刑務所が舞台となった映画だ。映画の撮影許可が降りるまでに6年も要し、映画製作は困難を極めたことが監督によって語られている。

映画の舞台となる「島根あさひ社会復帰促進センター」（以下島根あさひ）では、受刑者のことを訓練生と呼ぶ。それは、彼らを処罰の対象ではなく、生き直す訓練を受ける対象と見ているためだ。この映画は、TCプログラムの訓練生が対話を通して過去の傷と向き合い、更生の希望を彼ら自身の力でつくりだす過程の一部を観ることができる。「加害者」となった彼らは社会から隔離されており、刑務所の外にいる私たちの多くは、普段マスメディアによって造られた典型的な「加害者」としてしか彼らに触れることはできない。そのため、映画を観た多くの人は、訓練生たちが語る言葉と自身の持つイメージとに大きなズレを感じるだろう。

この映画は、TCプログラムに参加する4人の主人公を中心として、TCの様子や彼らの個人インタビュー、そして彼らの過去を再現したアニメーションによって構成されている。訓練生は皆、例外なく罪を犯した「加害者」となってTCプログラムに参加しているが、映画を観ていく中で、彼らは最初から「加害者」であったわけではないという当たり前のことに気づく。彼らが語る過去には、虐待、ネグレクト、他者からの疎外があった。彼らは「加害者」である前に、「被害者」だったのだ。彼らは社会から見えない場所、救済ネットワークからはみでた場所で押さえつけられ、必死にもがいていた。このような過去は、単純な自己責任論では片づけられない。TCプログラムでは過去のトラウマなどを他者に話す対話を推奨しており、映画を観る者は、訓練生たちの声で語られる言葉、また沈黙を通して、彼らの現実を目の当たりにする。彼らは苦しみ、悩み、時には涙しながら必死に言葉を紡ぎ、自身の現実に向き合うのだ。

自分と向き合う。口にするのは簡単であるが、実践できる人はどれほどいるだろうか。自分の心に向きあい、傷を受け入れることができているだろうか。人は生を受け、自分の人生を歩む以上、傷と無関係ではいられない。しかし、傷を受けたことに気づき、そしてそれを受け入れている人はそう多くはいないように思う。人はだんだん、自分を守るため、傷つくことに慣れていく。自分の傷に鈍感になることは、他者を傷つけることにも鈍感になってしまう可能性をはらむ。その延長に悲劇は起こるのだ。彼らは決して私たちとかけ離れた存在ではない。観客である私たちは、このことに改めて気づかされる。

映画の中では、刑務所内の撮影ということもあり、個人識別ができないようにTC参加者の顔にはぼかしをかけてある。これは訓練生の利益保護の観点など多くの制限あってのことだろうが、個人性から遠ざかっているように感じるのは否めない。このぼかしは監督も苦しめられた点だという。この映画で、視覚的情報から彼らについて得られるものは少ない。しかしその分、彼らの個人性は声に現れる。そして、彼らの声が紡ぐ言葉から「彼ら」をみることができる。TCの基本的前提に「隠すことより明かすこと」[1]とある。ぼかしの中から聞こえる彼らの声は、個人性として現れ、明かす力を持っている。だからこそ、彼らの声は戸惑いとして、苦しみとして、かすかな希望として、まっすぐ観る者の心に届くのだ。

この映画は感情にうったえかけるようなシーンが多くあるが、その中で少し異なる空気を持つ一場面がある。それは、島根あさひのTC修了生と民間職員などの人々で行われたピクニックの場面だ。顔などの個人を識別するものをことごとく排除しなければならなかった刑務所内

とは一変、それぞれの光る表情が印象的に映る。そのピクニックに参加する幅広い年代の方々の接点は、島根あさひだ。本音で語ることが推奨されるTCとは異なり、建前が大切という風潮がある社会において、出所者であると明かすことは多くの偏見がつきまとうことになる。それゆえ、自分の過去を隠さざるを得ない。その中で、社会に出てからの不安、葛藤、また苦しみを共有し、自分を明かすことのできるサンクチュアリ（安心して語れる場）として、ピクニックは機能しているのだ。

再考すべきなのは、自分の過去を明かすことのできない社会自体のように思われる。明かすことが全てにおいて良いとは限らないが、誰かが何かを明かしたいと思ったときに受け皿があるということが重要だ。隠すことはいつも解決を遠ざける。TCプログラムで大切にされる「隠すことより明かすこと」は、隠蔽し抑え込むことで起こる悲劇を繰り返さないために、社会にこそ有効ではないか。受け入れる側である社会にも変化が必要なのだ。サンクチュアリとは、彼らはもちろん、全ての人に不可欠なものだから。

「責任とは応答することである」。これは、『プリズン・サークル』を観た数か月後に観る機会を得た、同監督の『*Lifers* ライファーズ　終身刑を超えて』（2004年）にて語られた言葉だ。TCプログラムの場とは、応答する場だ。TCプログラムの訓練生は、ガーデンチェアを円にし、対話を繰り返し、応答する場を彼ら自身でつくりだす。押し込めてきた自らのトラウマを語り、それを他者に受け入れてもらうことで、向き合うことを無意識的に避けてきた過去や傷を自分の一部として受け入れることができるようになる。そこから、自身の罪と他者に与えた傷を理解することにつながっていくのだ。

当然参加したばかりの訓練生は、上手く内面を表現できなかったり、表現することに戸惑ったりする。しかし、徐々にTCに参加する訓練生同士での関わり、支援員との信頼関係の中で、自己表現が可能となっていく。この過程で必要なものは、他でもない、その場を構成する訓練生たち自身なのだ。そこに映るのは、「加害者」ではない。個人性を獲得した、1人の人間だ。個人性獲得の一部をカメラのレンズを通して観ている私たちは、内/外の境界に存在することになり、自然と応答を求められるようになる。彼らは応答する。では、彼ら以外はどうか。彼らの声に刑務所の外にいる私たちや社会は応答できるのか。このような問いを映画は静かに投げかけている。

1｜坂上香「プリズン・サークル―囚われから自由になるためのプラクティス第4回」『世界』第931号、2020年4月、190頁

参考文献

坂上香「プリズン・サークル―囚われから自由になるためのプラクティス」『世界』第928号−第936号、2020年1月−9月号

映画『プリズン・サークル』公式ホームページ
https://prison-circle.com/index.php（2020年12月9日最終閲覧）